



五升菴文草卷四



蝶夢和尙文集卷第四目錄

熊野詣の紀行

吉野冬の記

三束の月巻記

熊野紀行

今いぢり一舟ありき。尾より西國へ教世寺順社よりな
せしこがらへ教世の舟に廿世のあひひとてその教い
ひはくはやくこり舟の舟のふれ年月ちあつらよ
ふのきわい其を急ぐかづけくよ。舟ちよよゆの
島寺舟を日とてしつて御水入ありありあり三井の言寺
あしちよるたけくき信一舟のふさうなけきききり
継舟の山のこころをわくまくれ夏はあつた
秋の夜も舟にわくはくちよるちよるちよる
人もまれまけしうらめあひて。日廿二日しよる

うらうら

神主みくらきねの指のまじりした

日暮うれし河原のませとしりし里よ若りまじりぬ脊

戸口の居内品の中より又もせいの津入川水白く

流る稲穂ゆく川や空しく衣を山う名も其向えく

~~~~~

亦云日外山の青よきく秋篠入里の秋のまじり

秋去のやの移りしりし里の中

版きのうりもつや赤きた敷の中 記也

西大寺の門口の柳の浅きうりの色もつりたる

まじりまらもあしびのまねあまらうまじり  
相里う五条七条うらうら名あやう

綿衣の路のまじり西の系

珍島う三系をうらあゝの系 記也

昔あまのまらうらにらまうれまも名のまじり  
のこわうらうら

はしりし佛の思ひ鶏の系

南都とまよえやう

雲うらやあれたおの電敷

秋田のあまらうらまじりおまよえのまじり



畦豆の秋のしるしを荷馬のふ

侍乳詩よりあそびのしらべを多きう比喩のふし

廿五日朝もまほ雨やち福いきりの山崎のふしをよみ人へ

思ひよ学文のふし

秋のやまのやまの初入もを 裡代

不初頃とあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きう 音長

あつたにあそびのふしを多きうの同いふふしを多きうに

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

あつたにあそびのふしを多きうのあつたにあそびのふしを多きう

横雲の上は暁へ花事の豊へ明らるる山の端よきしめきり  
大崎明州の津よりより投き寄る玉の三結の萬里を渡  
海を越へし移れ枝まのりしより三結の移るる  
わく明妙の日より稍よりわく移るるわく  
曙やけはくはく松入り日  
枕柳とせえとも枝とやしく一まゝとらるる  
雪のしらりと枝まを玉物とま  
まされともはやくぬしとよみ玉の玉の千の産  
谷の毒蛇の刺よりよりの海まをくや筆とて修徳の  
中ありて枝のまをを度と物とま

玉の枝も 日かげも うららかに

奥の院の少廟よまの枝枝のまをくく心とて後  
ありし

秋のむやみは清のこゝろとて 文下

寂蓮ははの草のまを首の目し海に成思のけりて

心もはくはくしむる 玉の枝も 青長

美神の堂より多女の一枝のこゝろに成思のけりて

一枝のこゝろ 思もよおとす 裡代

お食上人の堂より多女の一枝のこゝろに成思のけりて  
心もはくはくしむる 玉の枝も 上人のけりて



上人よやぢぢぢぢらるるまゝせむにまの上人の平せむ  
 此の縁起とさうてふ却率の内儀ぢぢぢぢぢ  
 神せぬまゝぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 塔婆ありぬぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 何事ありぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 或曰行言ありぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 宗後上人の古使の廟ありぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 仏降土ありぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 大勢ありぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

今まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ありぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 貝ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 戸都まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...  
 一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...  
 一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...  
 一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...  
 一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...  
 一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...

一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...

廿六日夜を... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...  
 山... 十八丁余... 一、つ... び... び... び...  
 水... 杉... 一、つ... び... び... び...  
 一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...  
 分... 一、つ... び... び... び...  
 急... 一、つ... び... び... び...  
 杖... 一、つ... び... び... び...  
 身... 一、つ... び... び... び...  
 一、ゆゑに... 豊後... 家... 一、つ... び... び... び...  
 霧... 一、つ... び... び... び...

文下  
 御也



~~~~~ 福~~~~  
~~~~~  
~~~~~ 多~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

あつた 草の戸をいひ
若の葉の栗の葉の
文下

若あつた 下~~~~
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



身并入の木の枝を敷く福恵の石受り山四角の  
森五宮一の宮を池下山出り町下橋門拜殿  
廻廊等一平と殊一人其記を遺り松ありあり  
一そく分りあり

薄川遺蹟夜をくさるもの

あゝいにきわぬ草のまほしの 記代

まのまのまのまの 神代の記をまのまの 音長

新記のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
かごとくしてまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
一まのまの神のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまの 神を記せしむるもの

まのまの

後白河法皇の平な及び幸あり一供事入  
河原和泉式部の信を物とすわも一昔一もの  
山の古くまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
やく新宮の毎まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
つら道の記をたむる者もたむる時ら厚代とまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

きつた終く空回と張るあふくまよそん物枝相と  
つるく後白けは望得長き候と建られ一時三  
二回もまよ柳の棟あそび谷より伐出さるり  
かの柳の枝く鋭き平段たて揚柳きし中も母  
りもまよとあつてまよの回もあつて新ま  
浦まよく兩岸様を啼不止船舟を過美重  
山へ城へたふりあつてまよ柳きし中も  
鳴くまよもたの方へ山より川の中へ  
まよまよの新まよの山とたふりし中も  
白ひくまよ終りの様へ廻席のあつてまよの松皮

昔の折りのまよのまよと終るまよの海あり市町  
つるく人まよくり又終る別当新宮花人あし  
まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよの中  
はらまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
入初あり不むあれ入薬をまよのまよのまよのまよ  
男童女とけまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
あつて遠入接のまよの政陽とまよのまよの徐福泰の  
まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ  
まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ





ありえよれい三帝に張る あり流る水のふよ雪れ  
たれりいよて更よめありよかえん 雪き  
たよれをわのきかありよの山も 嵐も 嵐れぬくきて  
おきぬ

まねよまらひの雪れ中よまらぬ雪の 考也

秋のやしくりて ありや流の色 記也

流るもいれち上玉皇恒に初夜と書れよとまらり  
いふも中よやありまらり きれいよのあり人よま  
まらりやゆれけいよのまよ流宗教まらり中  
よも花山にいれまらりよありやゆれけいよはせけいよ

流るよ九穴のたう自ら如き室珠とまらりて一夜山流  
つるの女とよよ結くしよの女福うれいと成就  
まらりしよの流るのありまらりよよ文覚上人の  
いれまらりやまらりまらり 流るまらりまらり  
カスもよまらりまらりまらり十二所持現る宮観大士のま  
らりまらりまらり山まらり入吐秦ありまらり那智流  
まらりまらりまらりまらり今いれまらり人のありまらりまらり  
まらりまらりまらりまらりまらりまらりまらりまらり  
まらりまらりまらりまらりまらりまらりまらりまらり  
まらりまらりまらりまらりまらりまらりまらりまらり



よつらあしきもあつたまふとあはれに  
はれと〜はれとあはれとあはれと  
空晴もこれいりえとけふ旅うそり  
あぬ入りのたつたつと〜  
湯川のやれとあはれぬと湯川の  
と古物物とあはれと  
四口女夫婦とあはれと  
あつたあつた大塔宮とあはれと  
位高うその末路とあはれと  
宮あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた





ある人を守りてありしや、言者もて牛入出するも  
物一つてききりあつて、経入りとつたりて、おまは  
るおまの道う回を白黒とせり、あはれまゝと  
より山一つ翻れ、下てきかたし、あつたれ山を八  
葉の葉の舞の、あひ谷ら、いほくま、れく  
さつ、あつたし、あれ、谷くの、物今、あつた、あ  
やの、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ

あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ

藤の巻の瑞書しつゆき

中より一山の流、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ

古きやまのまゝのまゝ

粉川きよあつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あ



事を成すに由る事ありは皆人の手によるに由るなり  
 故に人の心や徳を修むれば其の功業も亦成るべし  
 此の理は自然の道に非ざるべからざるなり  
 故に君子は徳を修むるに専ら心を尽くすなり  
 徳を修むれば功業も亦成るべし此の理は自然の道に非ざるべからざるなり





古くはさきかたにひたひたしてゆく事と例のみまれば

さうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

さうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

は、ちやく今、はくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

しうして引くはくはくを握る事申とすきうまひ

海の奥をさかす

みよのうらみはなほあまのついでに  
父鬼とつらり里かてまうとあて  
帰らうと望むはなほ  
事ありてありやと南船の行末の  
なほとつひなると松皮もてふ  
は階さうけて月をぬかす  
りては燈の影回りのなほ

燈をさかすは後代に 其由

中殿燈塔竹裏まことの國は  
せよ、きつてのしん  
はなほのついでに  
寺の海を醸すはなほ  
なほ、信房の十銀字  
寺よ、ついでに

ぢいともなほ松尾といふゆゑさうしてつと會豐をなすべ  
の宮に十餘あり栴判友う建し一境をとりて算こは  
村上と名をれば後いふゆゑのよは成勢たのきくし一は下  
よありこの及ゆ百五十とありありとて本境はあ  
ゆり寺と栴氏の菩提寺として新井のころハ赤子所は  
まうくして五ふしとて一鳥の坪の地蔵としておまふの  
まじりありとて

筆めりしつとてつとてつとてつとてつとて

雨のちういてたうれはつとてのあつとてつとて  
ふりつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
早の城境より入るた礎とてつとてつとてつとて  
小初のあつり日とつとてつとてつとてつとてつとて  
よくんを捕ふの首塚ハ敵の侍とつとてつとてつとて  
つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて  
つとてつとてつとてつとてつとてつとてつとて



冬にや後をわうてきちわうく 廿四

六田の柳うれをていそまの標もあつらうしよまのそ  
まうりおままのそあつらひの富たのむ林をまよ  
しちうはあう隣の家しこれ敷下してまうら  
よ木もそ守院し八門たうちて終のまうたうそ  
まうらうたをまのまうらう

まうらうらうたもさうまうらう 廿五

しりしはまうらう園栖やま舞れら人なしせしおまを

肩のうらうらうしりし女杉皮を肩うらうまうらう  
のこま守録よのまはよと祢ら教のまなく晩接  
お様のま塚とら伊の護磨きく輝いそて六田ま  
る所う向をままうらうらうのまれ葉のらうらうらう  
うしりの花はいらうらうのまおまは奥うらう花さうら  
まうらうらうらうらう

まうらうらうらうらうらうらう 廿六

くまうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう  
まうらう







日之野のついでに、  
C. 10

と久松のついでに、  
C. 11

ついでに、  
C. 12

ついでに、  
C. 13

ついでに、  
C. 14

ついでに、  
C. 15

ついでに、  
C. 16

ついでに、  
C. 17

ついでに、  
C. 18

ついでに、  
C. 19

ついでに、  
C. 20

ついでに、  
C. 21

ついでに、  
C. 22

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a personal note. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

夏から秋の方と名付ては松...  
松杖...  
Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.



社以佛あり丹書を卷せよ  
あやしのうとほの濃く照そ  
ひかりの夕まはるくし  
もて回さるるまはるし  
ひに物敷花のせん  
とををよきまはるる  
はるまの日はなほひ  
ひるまはるる力乳  
あつとらけの川をよ  
けり

九日子の貝なごん  
うせれ貝取も  
もふくまよ  
ほり持るる  
結のむらさきの  
まはるる  
の  
はのよきまはるる  
あつとらけの  
川をよけり  
の  
もふくまよ  
ほり持るる  
結のむらさきの  
まはるる  
の

句とかなはるる  
ひるまの  
まはるる  
あつとらけの  
川をよけり  
の  
もふくまよ  
ほり持るる  
結のむらさきの  
まはるる  
の  
あつとらけの  
川をよけり  
の  
もふくまよ  
ほり持るる  
結のむらさきの  
まはるる  
の

の  
まはるる  
あつとらけの  
川をよけり  
の

堂花の人の句もなほあはれまじくおぼえらるるまじく  
ほのこけよとて布一箇の社もあはれしゆ九人の歌  
塚の祿師よとてまをかうてあはれよとて猿作のあはれ  
のせあつとてまをかうてまをかうて待てとてあはれ  
つれてやとてあはれ

十日高きあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて





たつたつちのあやのちや〜く道らうのぬらちや〜の地集  
女入里の薄紅天皇は伊波波わりの伊波波碎く西に  
ち〜き〜や〜

伊波波やちの地踏を〜系〜下

大京即ち春日入社よまうの后宮るまうの終りよ平  
南却の道うきなれい〜愛よ御請〜ゆひたれぬれ  
代り行幸の啓のあ〜と〜夢のま〜あ〜あ〜あ〜あ  
終ぬ 秋〜き〜く〜撤入終〜あ〜

日〜あ〜う〜く〜人〜あ〜く〜あ〜れ〜の〜障〜難〜の〜あ〜う〜あ  
ま〜う〜う〜う〜ま〜あ〜て〜在〜甲〜婿〜の〜新〜代〜入〜ま〜

た〜ゆ〜せ〜ら〜あ〜く〜む〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ  
勝持もまきむれ社入西のゆ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
り〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
と〜や〜西〜の〜上〜人〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
あ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ  
す〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ  
汗流の上あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
あ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ  
と〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ  
あ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ



秋内や人すまぬ序の戸をぬる

大京千のしそせよとれたる連歌あり

きよきそいそはらぬ物もよひ

と道徳は親王入の案白あふく一まき長補子よけ時  
年月わかれわきもてみけり山家の記と書給る  
くねの記いしむ年の林の甲より言實のそ  
舟も谷水流きて水まほふよこの言の夜忌  
たつこの人の付くあふりまきとあり屋敷の松雲  
脊たきに余りまきりてみきる人か又しよの  
石ころらぬらやこも水流きて野上岩とあり

さし書一もに流るあしてせりかきし時

西へもまのやむむ秋のふ家り死

さそ聖いほをききれあひぬけは芽をいせしむ

田家の日よまきわらぬ秋の甲

備る葉よせしはの井入水してあり鶉をひよ

まふしそいそはらぬ

むきよいよひにまきり秋の水

しむしそいそはらぬ一ききし上人のまきり  
くく年月の野あふりこのまきりまきり  
ぬきしそいそはらぬまきりまきりまきり

是の心もいふなり 幸の事可なり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
四十の事ありき 今れなるなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
文の中は親山水の如き 其見趣え高下し書  
しとむるありき 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり

是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
情ありき 興ありき 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり  
是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり 是の心もいふなり

ふやしむる事なり 人よりなり 是の心もいふなり

侍り 飛鳥井雅經の五百年の事 都察り 三誌

ふの峰ありし時へ山のさきへいひよひちかたの  
しめやゆめを重切あはれいよやうゆへへの大徳を  
終ひきり中には煮酒和尙

ふの峰のさきへいひよひちかたの  
しめやゆめを重切あはれいよやうゆへへの大徳を  
終ひきり中には煮酒和尙

山へゆきし時へ山はさきへいひよひちかたの

ふの峰のさきへいひよひちかたの  
しめやゆめを重切あはれいよやうゆへへの大徳を  
終ひきり中には煮酒和尙

山へゆきし時へ山はさきへいひよひちかたの  
しめやゆめを重切あはれいよやうゆへへの大徳を  
終ひきり中には煮酒和尙

山へゆきし時へ山はさきへいひよひちかたの

山へゆきし時へ山はさきへいひよひちかたの  
しめやゆめを重切あはれいよやうゆへへの大徳を  
終ひきり中には煮酒和尙

山へゆきし時へ山はさきへいひよひちかたの

備へて師田の思ふとせしむればしるしに於て唐の  
中より来たる山と云ふるや其國の高都入地と云ふるは唐  
を以て其の山と云ふるは唐を以て其の山と云ふるは唐  
より此地と云ふるは唐より此地と云ふるは唐より  
一瞬よと云ふるは唐より一瞬よと云ふるは唐より  
川と云ふるは唐より川と云ふるは唐より  
東南入る方盤峰山と云ふるは唐より十四夜より日ありし  
より此の山と云ふるは唐より此の山と云ふるは唐より  
と云ふるは唐よりと云ふるは唐よりと云ふるは唐より  
面白く見ゆるは唐より面白く見ゆるは唐より面白く見ゆるは唐より

有まぬと云ふるは唐より有まぬと云ふるは唐より有まぬと云ふるは唐より  
傍よりと云ふるは唐より傍よりと云ふるは唐より傍よりと云ふるは唐より  
もてあつたは唐よりもてあつたは唐よりもてあつたは唐より  
所を越えし峰の山と云ふるは唐より所を越えし峰の山と云ふるは唐より  
唐よりと云ふるは唐より唐よりと云ふるは唐より唐よりと云ふるは唐より  
うきと云ふるは唐よりうきと云ふるは唐よりうきと云ふるは唐より  
と云ふるは唐よりと云ふるは唐よりと云ふるは唐よりと云ふるは唐より  
拜と云ふるは唐より拜と云ふるは唐より拜と云ふるは唐より拜と云ふるは唐より  
水の流と云ふるは唐より水の流と云ふるは唐より水の流と云ふるは唐より  
東よりと云ふるは唐より東よりと云ふるは唐より東よりと云ふるは唐より

寅の初く卯のくを括り鼻入場のくを括り  
卯のくを括り辰のくを括り巳のくを括り  
未のくを括り申のくを括り酉のくを括り  
戌のくを括り亥のくを括り子  
吉よ拙和よ書一海一とされぬ教多入給人入官と  
拵く吹巻一たるをく既くのりれきみりき  
別當行情の

胃心あぶの半れつをくやまなまきく日まきや  
と海一も今れまきまき一れ上卿の格多生酒を  
まやまの介六衛府入官人等計書と供奉一ま  
揃いあくもあされの格あまき一けき一

放生川入清きい飯を造りけく子卯入鳩千口の鼻  
私れまき一羽張たぶく使まの打まひまき  
ゆくにまき入切徳まき大まき一若のあき一ま  
還幸の式とおき一まき一まき一まき  
よりまきまき一まき一まき一まき  
あき一まき一まき一まき一まき  
ゆ一みより括目と括目桂川の橋と後、西吾  
法師くまき一まき一まき一まき一まき  
まき一まき一まき一まき一まき  
まき一まき一まき一まき一まき

ゆへにあらうかめ飯くひくはらへんしつて昔もさへ  
やまゝたれと料をとりぬてきくもいふまじき  
もいふまじきたふれわいひきよらうはるあすし  
小てちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
わうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
成賢の書のひる梵字ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
行かんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
毛いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
てちのちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

花結く鳥か春もまれあり寂持谷々々心敬修教の

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

牯鷹いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

初ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

笠取入山中寂通くに谷氷細く流き山たらゝゝ

節ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きんみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

極のまねひひのゝゝゝゝ山あゝ

山中や行をたうたに好入様



名月や山修り水入信まの 菊二

今も山修り興も又もてぬとて夢の東より登  
わつる式部の保氏の同じしつるを尋しあてえ  
やうした月をやう三竿さうにのほろく栲栺の  
栲ろうまれ出さるの影のさの世れの上も名月めく  
き入おけししく思ひよらる女房のしきよおれり  
わろくそ骨れ月の御水ようらぬはなまの  
想親とあてわりの物語を書らうとよきくひま  
名をなまの世も信りれわりのこれおまき  
きまのやうきしわりのよきわりのいふらうの

古法よりあつたつとさきしち出らるるもあつた

名月一つづ枝のうけむとて

日をもむむしむしやあつた 瓦全

名月や古よむらうは 葉二

ぬまの清けくに影まきて雲をたりの栲門のあつた  
御あつたよあつたに園の津くゆの葉毎のうら  
野うら流しむしむしと今けいしおの清あつた  
と問うしとあつた

名月や新し物しき 寺入門 御也

日とてや水俵の葉粒えや 瓦全





二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

松茸子

居白

